

研究ノート

「メソポタミア」についての覚書

岡田 保良*

はじめに

古代西アジアの文明を主導したティグリス、ユーフラテス両大河の流域を指す歴史的な地域概念として、「メソポタミア」という呼び名ほど重宝する単語はない。ヘレニズム期のギリシア人が遙か彼方の地方を指した名称が、今日では洋の東西を問わず、それとして広く定着した観がある。ただその範囲は、「(複数の)川の間の土地」という原意をもはやはなれ、およそ現在のイラク共和国国土を包含し、北シリアや、南東トルコにも及ぶ¹⁾。それゆえ北部と南部では自然環境はもちろん基層となる文化は一樣といえるものではなく、都市化の進捗の度合いも相当にちがっていた。アッシリアとバビロニアという、やはりギリシア語を経由して我々に伝えられた歴史上の地理的区分もそうした必然によっている。その両者を合わせた地域がおおむね「メソポタミア」に当たるけれど、歴史のスパンを古くは旧石器時代、新しくはイスラーム以後にまで引き伸ばしてみると、この地域を「アッシリアとバビロニア」と呼んで済ませるわけにもいかない。「メソポタミア」が重宝なのは、大河を境界とする地理的明晰さに加えて、それが含蓄する歴史性の希薄さによるといってもよいと思う。これを広義のメソポタミアとしておこう。

ところが最近になって、イラクのキリスト教遺跡を扱う関係から教会史やローマ、ビザンティンの歴史と接する機会が増えたこともあるのだが、「メソポタミア」に対する別のより限定的な——より古典的といふべきかもしれない——地理的概念がけっしてそれほど過去のものではないことを筆者は知った。これを狭義のメソポタミアとする。あたりまえに思っていた上記のような「メソポタミア」が、もしかしたら我々のせ

まい専門領域での独り善がりではないのか、という疑念すら生じてきた。同時に、どういう過程を経て、先のような広義の地域概念が内外で定着してきたのか、はっきりさせておきたい衝動にも駆られる。ややもすると、それは日常的な研究の正当性にかかわる問題かもしれない、あるいは発展性のない後ろ向きの議論かもしれないが、ここに研究の余録として綴ってみることにした。

なお、メソポタミアの地理については数年前、東京大学の松谷敏雄先生から貴重な示唆をいただいた。つい最近も先生にお会いした折に話題となり、それが本稿執筆の大きな契機となった。ここに謝意を表したい。

古典叢書をひもとく

『歴史』を著わしたヘロドトスは、アッシリアとバビロニアを区別せず、バビロンをアッシリア人の都と呼び、バビロンに住む人々を、繰り返しアッシリア人の名で呼んでいる (I. 106, 178, 192 など)²⁾。ここではアッシリアが、バビロンとニネヴェという2大都市を含む明らかに広義のメソポタミアに近似する地理的用語だった。それが前5世紀代のギリシア人知識層の認識だったのだろう。ところが『歴史』には、「メソポタミア」は登場しない。もちろんそれより古くにそういう地域概念があった証拠もない。•M.A. ビークによれば、ギリシアの歴史家ポリビウス (前2世紀) が、両河川に挟まれた一部の地方をメソポタミアと呼んだのを初見とし、次いでストラボン (後1世紀) も同様に用いたという [Beek 1962: 9]。ほかにシチリアのディオドロス (前1世紀) やローマのプリニウス (後1世紀)、エジプトのプトレマイオス (後2世紀) らの著作にも「メソポタミア」は頻繁に現われる。Loeb Classical Library から、該当箇所をいくつか検証

* 国士舘大学イラク古代文化研究所

してみよう。

ポリビウスでは、まずメディアの四囲を記す中に、その南を占める土地として、アポロニアやベルシアと並んでメソポタミアが現われる (Book V. 44)。それがティグリス以西を指すのか、確たることは言えないように思う。次いで、セレウコス軍のモロンが自らをバビロニア君主と称したくだけで、

「エウロポスまでバラボタミアを占有、ドゥラまでメソポタミアを占有」 (同. 48)

と記す。メソポタミアをバラボタミアと対にして、恐らくはバビロンからドゥラ・エウロポスまで、ユーフラテスの両側一帯を示そうとしたのだらうが、その領域は見えてこない。付言すれば、ユーフラテス川について、

「ベルシア湾に注ぐと想像されるが、この場合は別だ。国中にめぐらされた運河が、ベルシア湾に達する前に川の水を使い果してしまう」 (Book IX. 43)

とし、彼の地理感覚にはいささかの確さを欠く面もあったようだ。

ディオドロスは、アレクサンドロス時代前後のサトラップのひとつとしてメソポタミアを捉らえている。

「ベルディッカスはアジアのその他のサトラップを乱さないことにし (中略) メディアをアトロパテスに、バビロニアをアルコンに、そしてメソポタミアをアルケシラウスに、それぞれ与えた」 (Book XVIII. 3)

「インドのサトラップの隣はアラコシアが占め、(中略) バビロンはアラビア沙漠まで広がる。他方、内陸方向には、二つの川にまたがり、その名を両河に負うメソポタミアがある。メソポタミアのつぎには、呼ばれるままにいうと上シリア、…」 (同. 6)

というように、メソポタミアは両河に挟まれ、かつバビロニアとはっきり区別され、さらにメディアや上シリアと隣り合う領域をディオドロスは指したのだった。

ストラボンの『地理書』にはメソポタミアが頻繁に登場する。地理的には、ティグリスが東側を、ユーフラテスが西と南を流れ、その間にあることがメソポタミアの由来だと述べるとともに、北方のタウルス山

地がアルメニアと隔てるとする (Book 16. I. 21)。両河を結ぶ最小距離はセレウキアやバビロン近傍で、200スタディオンよりやや大きいとし、ポリビウスなどに比べてより正確な情報がもたらされていることをうかがわせる³⁾。さらにはバルティア人、メディア人、アルメニア人とならぶアジア各地の民族の一つとしてメソポタミア人 the Mesopotamians という理解まで生じている (Book 2. V. 32) が、これはあまり一般的でない。

プリニウスの『博物誌』では、距離の表記がさらに詳しくなるとともに、メソポタミアの地域概念がやや曖昧になっているように思える。

「メソポタミア全体はかつてアッシリア人のもので、バビロンとニネヴェを除けば人口はまばらだった」 (Book VI. XXX. 117)

などと、広義の意にとれるくだりもあれば、ローマ領行政区画を意味するらしい「メソポタミア地方 praefectura Mesopotamiae」に言及する箇所 (Book V. XXI. 86) もある。また、ユーフラテスの分流が、

「メソポタミアに入ってセレウキアを横切り、その町を囲うように流れるティグリスに注ぎこむ」 (Book V. XXI. 90)

あるいはやはりユーフラテスの流路について、

「メソポタミアの始まりからセレウキアまでの距離は、ユーフラテスを航行すること1125マイル」 (Book VI. XXX. 125-6)

など、メソポタミアの記述が両河とセレウキアとの関係から述べられる。全般的にはセレウキアより下流域はメソポタミアから切り離そうとする見方に傾いているようだ。これとは別に、前1世紀半ば、湾頭のカラクス (あるいはカラケネ) 地方出身のインドロスは、バルティアとローマとの交易ルートについて叙述した記事の中で、ティグリス河畔のセレウキアがメソポタミアとバビロニアの境をなすという意味のことを記している [Schoff 1914: 5]。しかしプリニウスがしばしば引用するマルクス・アグリッパの見解の中には、

「メソポタミアという地域は、東をティグリス、西をユーフラテス、北をタウルス、南をベルシア海で限り、それだけで長さ800マイル、幅360マイルとなる」

(Book VI. XXX. 137)

という地域観まで見られ、この頃、つまり紀元後1世紀の中ごろ、メソポタミアの地域概念はすでに拡散してゆく傾向にあったかのようだ。

以上のように、古典期の著述家たちにとってのメソポタミアは、その原意にもかかわらず、各々が指示する地域概念に多少の差がある点に注意しておきたい。もともと便宜的な呼称であったところに、ヘレニズム期のサトラッピーや、ローマ領の行政区域などが重ねられ、すでに古典期のうちにその地域概念は多義的なものにならざるを得なかったのである。

聖書とキリスト教の世界

古典著作のみならず、キリスト教のヨーロッパ世界への普及もまた、メソポタミアの名を広めることに一役買っている。ただ一方でその地域概念をさらに複雑にしてしまう。まず旧約聖書がギリシア語に訳される際に、北シリアにあってアブラハムゆかりのハランの土地を指し、「2つの川のあるアラム」を意味する「アラム・ナハライム Aram Naharaim」というヘブライ語に対して、訳者が本来の指示概念を理解しないまま「メソポタミア」なる単語をあててしまったというのである〔Layard 1849: 237〕。ピークもまたこの点を強調する〔Beek 1962: 9〕。この場合、アラム地方における2つの川とは、一方がハブール川であることは間違いなく、他方はユーフラテス本流か、またはハブールより上手の支流バリフ川を指すことになり、メソポタミアの意味は地理的にきわめて狭くなる⁴⁾。ところが新約中の「使徒の働き 7」では、「メソポタミア」をアブラハムの故地として「カルデア人の地」と同義に扱っている。一見「メソポタミア」の概念が、一気にユーフラテス下流域にまで拡大されたようにみえるが、新約が編纂された時代には、メソポタミアに対するさきの古典的解釈も、「カルデア人の土地」そのものの位置もすでに曖昧になっていたかもしれないし、さらにいえば、作者にとっては文脈上どうでもよいことだったと考えられる⁵⁾。

ローマ帝国は、パルティアとの抗争の過程でこの地帯に幾度となく攻め入り、2世紀はじめのトラヤヌス帝の時代から「メソポタミア」という県（プロヴィン

キア)⁶⁾の興廃が繰り返された。3世紀のセプティミウス・セヴェルス帝の時代には、北西部のみが比較的安定したローマ領としてメソポタミア県とされた⁷⁾。ビザンティン帝国の時代になっても、メソポタミアはオリエンスという帝国東端の州（ディオエケイア）を形成する一つの県だったが、6世紀はじめにさらに3つの県に細分されたことがわかっている。「アルメニア IV」「メソポタミア」「南メソポタミア」がその3県であり、それぞれの県都が、マルティロポリス（シルヴァン）、アミダ（ディヤルバクル）、アナスタシオポリス（ダラ）だったという⁸⁾。教会建築の遺構が集中することで知られるトゥール・アブディン地方は、その南メソポタミア県からビザンティン領外にまたがっている（図1）。結局、ビザンツ領におけるメソポタミアとは、西にハブール、東にティグリスという2つの川を控えた現在の南トルコの一帯を指すのであり、ササーン朝ペルシアが優位にあった今のイラク領は含まれていなかったことがわかる。しかもそれらが正統派キリスト教の大主教区にも対応していたので、キリスト教史におけるメソポタミア、あるいは教会建築のメソポタミア形式を言う場合に、この地方が代表するという理解が生じることもなったのである。4世紀という早い時期に、カエサレアの司教エウセビウスが著わした『教会史』の中に現われるメソポタミアは、まさにそういう限られた地方だった⁹⁾。こういう狭義のとらえ方は、とくにローマ世界や初期キリスト教を論じる分野では、いまでも完全に払拭されたわけではないと考えておいた方がよいかもしれない。たとえば、アラブ世界の初期キリスト教を詳述した J.S. トリミングムはメソポタミアとバビロニアを並列して記すことを常としている〔Trimingham 1979〕。メソポタミアという地方名は、もとをただせばギリシア・ローマの知識階層の世界観から生まれ、キリスト教社会に受け継がれてヨーロッパ世界に広まったという経緯を、あらためて承知しておきたいと思う。

ちなみにササーン朝へとこの地域の覇権が推移した当時、ティグリス上流でビザンツ領メソポタミアと接するあたりは、すでにアラブ系民族の進出が著しかったことから「アルバイスターン」と称され、旧バビロ

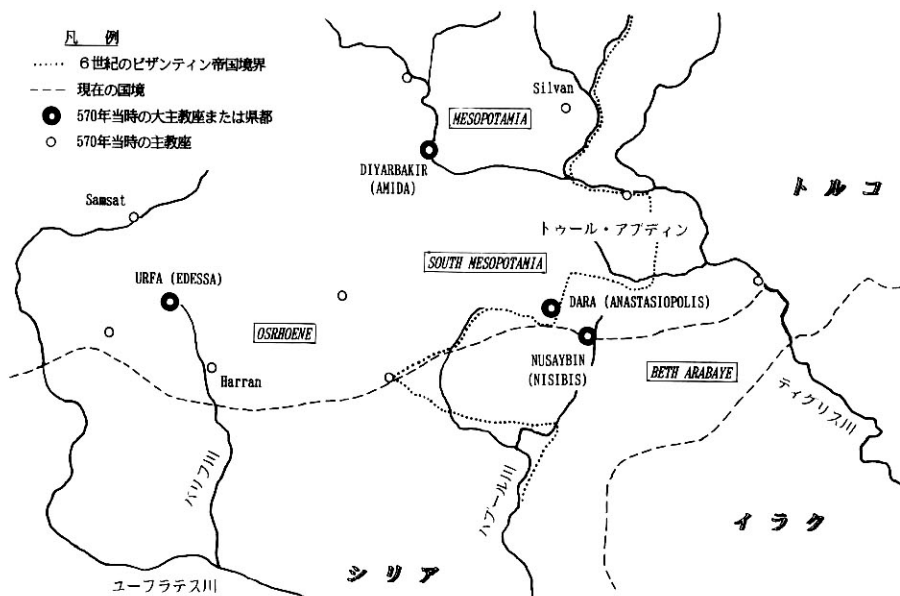


図1 6世紀代北部メソポタミアの教区と主教座
(M.M. マンゴによる [Bell and Mango 1982: 綴込み図])

ニアはアッシリアに由来する「アソレスターン」というのがペルシア側からの呼称だったようだ¹⁰⁾。後者には王都クテシフォンが含まれ、西洋史におけるペルシアに関する記述の舞台が、しばしばこれら両河地方だったことは注意しておく必要がある。たとえば、ペルシア教会ともアッシリア教会とも呼ばれる東方キリスト教が最も普及した地域について、410年の記録に現われる6つの古典的大主教区のうち5つは両河地方に属するというのが実態であった [Asmussen 1983: 932]¹¹⁾。つまり広義のメソポタミア地方は、ペルシア文化の一翼を担ったという以上に、古代から中世イスラームの時代へと橋渡しをなすべき初期キリスト教伝播の主要舞台として、なお重要な役割を果たしていたのである。いずれにせよ、当時、両大河流域一帯を包摂するような地域名称は存在しなかった。

近代考古学の先駆者たち

バビロニア、アッシリアまでを含めて「メソポタミア」という地域概念が、今日なぜ当然のごとくに用い

られるのか。それは偏に近代考古学の成果に負っているといつてよい。先史文化の生成と伝播の問題に始まり、都市の形成期を経て両者が国土の覇権を競うに至る過程をたどると、周辺のイランやアナトリアの高原地帯との影響関係に比べ、メソポタミアの両地域が互いの自然環境や文化相の違いにもかかわらず、民族、言語、造形理念など、文明的基盤をどれほど共有していたか、相次いで発掘される資料からもはや疑いようがないのである。では、誰をして「メソポタミア」をこの地域全体にあてする主唱者とするかとなると未だ判然とししないのだが、管見の及ぶ限りでは、そういう認識が一般的となるのは今世紀に入ってからのことのようなのである。

19世紀中、その地域観はまだ揺らいでいた。C.J. リッチとJ.S. バッキンガムは、ともに1810年代にアッシリアやバビロンを別々に訪れたイギリス人で、それぞれ著名な旅行記をのこしている。古典や聖書への造詣の深さ、遺跡への関心のつよさという点で二人は共通する。しかしメソポタミアの地域観には違いが

見られる。リッチはメソポタミアという表記をあまり用いないものの、主題としたバビロン付近の土地について「メソポタミアのこの部分を複数の運河が横切っていた」[Rich 1839: 56]とバビロンをメソポタミアの内に捉らえている。バッキンガムの方はというと、その旅行記のタイトルにまで用いたメソポタミアの概念を、古代文明よりむしろローマ史の観点から得ているようで、それはカルデア人の国やアッシリアと並び称するべき地域であり[Buckingham 1827: 128, 244]、「バグダードの女性の衣服はメソポタミア最貧の村で見るのと同じくらい貧しい」[ibid.: 381]などという記述からみても、彼の概念の中ではメソポタミアの外にバグダードがあったことがわかる。

19世紀半ばにメソポタミア考古学の草分け的な業績を残したA.H. レヤードは、アッシリアの遺跡調査報告を中心に数年の間隔をおいて、*Nineveh and its Remains* (1849年)と*Discoveries in the Ruins of Nineveh and Babylon* (1853年)という2編の書を著わした。ところが面白いことに、2書の間でメソポタミアに対する観念の相違がみてとれるのである。前者ではまだ聖書や古典による理解が優先されていて、メソポタミアは、アッシリアやバビロニア、あるいはティグリス東岸地方と一線を画する地域だった[Layard 1849]¹²⁾。またその土地が、アラブ人には「島」を意味するアル・ジャジーラ al-Jazirah にあたることも注記している[ibid.: 225]。ところが後者になると、ニッフェル(ニッブル)やウルカ(ウルク)の所在を「南メソポタミア」と表現するとともに[Layard 1853: 557, 562]、両河の流域全体を示した添付の地図に「メソポタミア」という見出しを付けた。ただ本文中には、アッシリアの一部をメソポタミアの外に置く記述があり[ibid.: 616]、ティグリス東岸をその地域概念の中に取り込むにはまだ躊躇があったようだ。

その後*Five Great Monarchies*を著わしたG. ローリンソンは、世界史上の5つの偉大な帝国のうち、カルデア、バビロニア、アッシリアの3つが、等しく「シリヤ―アラビア沙漠の外縁とクルディスタンからルリスタンの大山脈の麓との間」の地に生まれたことを強調する中で、メソポタミアを上下に分ち、カルデアの北端を上下メソポタミアの間に求めた[Rawlinson

1871: 2-3]。さらに、バビロニアはティグリスの西方にある広大な2つの平地から成るとみなし、両河の間にあって「ギリシア人やローマ人がいうメソポタミア」の下流部分と、もう一方は、ユーフラテスとアラビアの間に挟まれ、その豊かな川の右岸に沿った長いけれども狭い地帯とした[ibid.: 436-7]。ローリンソンにとってメソポタミアは、あくまでも両河に挟まれた土地だったことがわかる。

世紀が改まると、文明創始の地としての「両河の流域 the Valley of the Two Rivers」をメソポタミアにあてようとする見解が登場してくる。のちにキシュの発掘を指揮したS. ラングドンがコロンビア大学に籍を置いていた当時の講演録に、そういう叙述がある[Langdon 1906: 3]。ギリシア語の原意を説いた上で、メソポタミアに新たな地域概念を与えようとする主張であった。「前1500年までに、アッシリア人はメソポタミア上流の盟主となってバビロニアとアジア帝国の覇を競った」[ibid.: 8]と、アッシリアまでメソポタミアに包摂しようと意図した。しかし、やや遅れてニューヨークで出版されたL.W. キングによる概説書では、まだメソポタミアを両河の間に限定するという古典的理解がつよく反映されているばかりか、バグダード付近を挟んでMESOPOTAMIAとBABYLONIAを明確に描き分けた地図を添付している(King 1915: 付図)¹³⁾。かのプレステッドにしても、「肥沃な三日月地帯」という着想に至った折、「この偉大なる半円全体を含み込む名称は、地理的にも政治的にも存在しない。歴史的目的に応じて、その半円を特定する何らかの用語が是非とも必要だ」[Breasted 1926: 117 note]という認識を示す一方、「バビロニアの北にあるメソポタミアは沙漠地で、そこはバビロニアに属さない」[ibid.: 123 note]とわざわざ断わっている点からみて、彼のいうメソポタミアとはアル・ジャジーラにはかならず、バビロニアやアッシリアと隣接する別個の地域だった。その記述はなおも古典期の地理概念を踏襲する見解を披瀝したものであり、ラングドンの主張がここでは受け入れられていない。

これらに対して、19世紀末からドイツ隊によるバビロンの発掘を率いたコルデヴァイの場合、初期の報告書の中では「バビロニアとアッシリア babylonische-

assyrische」という表現はあっても、「メソポタミア」という言葉を用いることはなかった¹⁴⁾。彼の隊から別れてアッシュールやハトラの調査にあたった W. アンドレーは、ハトラの地理的位置をジャジーラ der Dschesire と表現し、「すなわち島、メソポタミア d.i. Insel, Mesopotamia」と注記した [Andrae 1908: 1]。その後まもなく、コルデヴァイは一般向けのバビロン発掘報告を著わし、「バビロンのイシュタル門はメソポタミア全域の中で最も印象深い遺構だ」 [Koldewey 1914: 32] などのほか、「バビロニアとアッシリア」を「メソポタミア」と言い換える傾向がはっきりしてくる。

またイギリスにおけるメソポタミア考古学を代表した C.L. ウーリーは、シュメールとアッカドの地を指して、バビロニアという呼称より「メソポタミア下流域 lower Mesopotamia」を好んで用いた。同時に、メソポタミアにおけるセム語系民族として、アッカド人、アモル人、アッシリア人を挙げ、いずれもシュメール由来の宗教と文化を受容したことを指摘し、言外にアッシリアをメソポタミアに含めようとしたのではないかと思われる [Woolley 1928: 179]。これより早く、フランスの L.J. ドラポルトは、バビロニア、アッシリア両文明の地として「メソポタミア」の語をあて、一書の表題とした [Delaporte 1923]¹⁵⁾。ウーリーの見解を支持していた G. チャイルドも、1936年の著書の前書きで現在のイラク領がおよそメソポタミアに該当すると記した¹⁶⁾。したがって、古典的用法から一転してバビロニアとアッシリアの全域をカバーする地域名称として「メソポタミア」を用いることは、この頃までにヨーロッパで定着したとみてよい。

確たることはまだ言えないが、アメリカでも同様な理解が共通のものとなったのは、ペンシルバニア大学が1927年に開始したテベ・ガウラの発掘、あるいは1930年代のシカゴ大学によるディヤラ川流域の調査を経たのちではなかったかと思う。いち早くメソポタミアの広義的な概念を積極的に敷衍しようと持論を展開したのは、ペンシルバニアの E.A. スパイサーだったように思う。彼はテベ・ガウラの発掘報告を通じて、すでに蓄積のすそんでいた両河流域の考古学上の成果を編年的に総括しようと試みる際に、シュメールから

アッシリアまでの流域全体を「メソポタミア」でくくり、「メソポタミア先史期の諸段階 stages of Mesopotamian prehistory」 [Speiser 1935: vii]、「メソポタミアの相対年代 the relative chronology of Mesopotamia」 [ibid.: 177] などと頻用した¹⁷⁾。一方、1932年に出されたテル・アスマルとハファジュの最初のレポート [Frankfort et al. 1932] の中では、「メソポタミア」の使用に、フランクフォートほか執筆者らの注意深い姿勢がうかがえる。たとえば、「バビロニアの歴史」とか「バビロニア史の枠組み」という記述はあっても、「メソポタミアの歴史」などとはけっして言わない。

ハムラビが統一した地域も「両河流域 the valley of the Two Rivers」だった [ibid.: 25]。しかし、同じ調査隊にいた P. デルウガズは、その後すぐに著わしたブラノ・コンヴェックス煉瓦に関する論考 [Delougaz 1933] において、もはや広義のメソポタミアを適用することに躊躇はなかった。そこにはラングドンやスパイサーの影響がはっきりと読み取れる。ディヤラ流域はバビロニアとアッシリアを結ぶ中間地帯で、文化的に両方からの影響がたよく及んだ土地柄であり、メソポタミアの広義的解釈は、この3地域を一体に扱うことのできる地域概念として最適だったと推察する。1940年にはこうした地域概念に即した「メソポタミアの家屋形式」なる論文まで著わされるようになった [Müller 1940]。

こうした近代考古学の地道な蓄積を抜きにして、今日的な「メソポタミア」の地域概念が広く定着したとは考えられない。「広義のメソポタミア」はまだごく短い歴史しかもたないのである。

以上のように、「メソポタミア」はヨーロッパ古典古代の著述家の間で生まれた呼称で、ローマ、ビザンツの世界や、キリスト教の歴史の上では北シリアや南アナトリアの一地方のみを指すことすらあったことを知る。19世紀末までは文字どおり「2つの川の間」に限って用いられるのがあつてであり、下流域のバビロニアがその範囲から除外されることもめずらしくなかった。ところが近代考古学はアッシリアとバビロニアの歴史をつよく関連づける成果を次々にもたらし、今世紀はじめまでには両地域の古代史を一体にとらえ

る必要性も高まった。加えて1932年にイラクが王国として はじめて独立し、ほぼ両地域を治める一つの統治体制が生まれる。遺跡の調査をすすめて、古代をかえりみることもその体制の下で行われることがあたりまえになった。かつてヨーロッパの人々がさまざまに用いてきた「メソポタミア」という言葉は、両河流域一帯を指し示す歴史的な地域名称として重宝な単語であると同時に、その土地の歴史と共生するイラク国民の国土としてさらなる重みを持ち始めたといえるのではなからうか。

注

- 1) 一例として、M.A. ピークはメソポタミアの範囲を次のように理解する。「メソポタミアという用語は、北のクルディスタン山地と南のマーシュデルタとの間で、かつ西方のステップや沙漠地と東方イランの山麓との間を占める多様な地域をカバーする」(Beek 1962: 9)。また最近の著書で目につくものとして、N. Postgate, *Early Mesopotamia, Society and Economy at the Dawn of the History* (London/New York, 1992) では、その冒頭で次のようにメソポタミアを説明する。「メソポタミアという名は、ローマの『地方のための造語で、いまではティグリス川とユーフラテス川の間の土地として用いられ、『肥沃な三日月地帯』の東側の角部分として叙述する一般書も多い。」
- 2) ここでの「歴史」は、松平千秋訳の岩波文庫版(1971)によった。
- 3) 「歴史」に採用されている 1 st. = 0.185 km という換算で、ほぼ実際値に近い。
- 4) ここでの聖書は、日本聖書刊行会刊の『聖書・新改訳』(1973年版)を用いている。「アラム・ナハライム」は「創世記 24:10」にある。また聖書とメソポタミアの関係については『旧約新約聖書大辞典』(教文館1989)を参照した。
- 5) 「使徒の働き(使徒行伝)」は、紀元1世紀の末近くに、福音書で知られるルカが小アジア地方で書き記した、というのが通説である。
- 6) O.D.B. 「PROVINCE」によれば、プロヴィンキアとは、ローマ、ビザンツ領内では、州にあたるディオエケシスをさらに分割した地方単位。県と邦訳される。
- 7) O.C.D. 「MESOPOTAMIA」による。
- 8) O.D.B. 「MESOPOTAMIA」によるものだが、ここに掲げた M.M. マンゴによる教区地図では、アルメニア県が表示されていない。
- 9) Loeb の Eusebius, *Ecclesiastical History* (2 vols.) による。115年頃のトラヤヌス帝によるユダヤ教徒弾圧(Book IV. 1)、ヴェルス帝(161-69)時代の異教徒増加(同. XXX)、250年頃の迫害とディオニシウスによる平和回復(Book VII. V)、著者の時代の各地の迫害(Book VIII. XII)などの記事にメソポタミアが現われる。
- 10) E.I. 「ARBAYSTAN」および「ASORISTAN」による。
- 11) 北部ではニシビス、アルベラ(エルビル)、カルカー(キルクーク)、中部はクテシフォン、南東部にマイシャーン、それぞれを中心とした教区があり、今のイラン領内といえバフェスタンだけである。
- 12) 「ひとひ砂嵐は、メソポタミア、バビロニア、スシアナを通じて夏の早い時期にしばしばおこる」(p. 124 注)、「今日アッシリアやメソポタミアの川辺に住むアラブ人が用いるような皮袋」(p. 128)、「メソポタミアの平原は、ティグリスと丘陵地との間の低地とともに、粗いアラバスターや石膏が豊富だ」(p. 254)、「ニムルドの浮彫りにある牡牛は、メソポタミアかアッシリアにいた」(p. 430) など。
- 13) 本文中には、「セレウキア、クテシフォン、バグダードはみなメソポタミア平原の狭い頸部に集まっている」(p. 5)、「アラブによるメソポタミアの軍事的占拠は、(中略)メソポタミアの征服に続いて、この国最南端のシャト・アル・アラブ河沿いにバスラが建設される」(p. 10)、「メソポタミア、アッシリア、バビロニア諸王との外交文書」(p. 219) というように、メソポタミアを両河の間に限定した記述がある。
- 14) 本書はバビロンとボルシッパの神殿遺構の報告書だが、その当時までに考古学的調査が行われたメソポタミアの遺跡について、巻末に概要をまとめている(Koldewey 1911: 60-66)。
- 15) チャイルドの一連の著作を紹介した福澤正志の指摘によると、日本語訳もあるという。またこれより半世紀以上も早くに、フランス人の探検家オペール Oppert の著書として *Expedition scientifique en Mesopotamie* という2巻本がある。いずれも未見である。
- 16) 「メソポタミアは現代のイラクとされ、アッシリア——だいたいチグリス河とモズール附近のザブ河の間の三角地帯——と、バビロニア——チグリス河とサマラの南にあるユーフラテス河の間の地帯——を含んでいる」[チャイルド1957: xiii]と述べている。とはいえ、1934年にチャイルドが著わした *New Light on the Most Ancient East* では、アッシリアとメソポタミアは別々の地域として扱われていた。この書も福澤正志によって1944年に「アジヤの古代文明」として邦訳が出版されている。
- 17) すでに1930年、スバイサーは *Mesopotamian Origins* を著わしているが、未見である。

参考文献

- C.H.I. = *The Cambridge History of Iran*, Cambridge.
 E.I. = Yarshater, E. ed. *Encyclopaedia Iranica*, London/New York.
 J.A.O.S. = *Journal of the American Oriental Society*, New York.
 O.C.D. = Hammond, N.G.L. and Scullard, H.H. eds., *The Oxford Classical Dictionary* (2nd ed.), 1970 Oxford.
 O.D.B. = Kazhdan, A.P. ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, 1991 Oxford.
 S.A.O.C. = *Studies in Ancient Oriental Civilization*, Chicago.
 W.V.D.O.G. = *Wissenschaftliche Veröffentlichungen der Deutschen Orient-Gesellschaft*, Leipzig.
- チャイルド, G.
 1944 「アジヤの古代文明」(福澤正志 訳, 伊藤書店).
 1957 「文明の起源」改訂版(上)(下)(ねづ・まさし 訳, 岩波書店).
- ヘロドトス
 1971 「歴史」上・下(松平千秋 訳, 岩波書店).
 Andrae, Walter

- 1908 *Hatra, I. Teil, allgemeine Beschreibung der Ruinen* (W.V.D.O.G. 9), Leipzig.
- Asmussen, J. P.
1983 *Christians in Iran, C.H.I.*, vol. 3-2, pp. 924-48.
- Beek, Martin A.
1962 *Atlas of Mesopotamia, a survey of the history and civilisation of Mesopotamia from the Stone Age to the fall of Babylon* (tr. by D.R.Welsh), London/Edinburgh.
- Bell, Gertrude and Mango, M.M.
1982 *The Churches and Monasteries of the Tur 'Abdin*, London.
- Breasted, James H.
1926 *The Conquest of Civilization*, New York/London.
- Buckingham, J.S.
1827 *Travels in Mesopotamia*, London.
- Delaporte, L.
1923 *Le Mesopotamie les Civilisation Babylonienne et Assyrienne*, Paris.
- Delougaz, Pinhas
1933 *Plano-convex Bricks and the Methods of their Employment* (S.A.O.C. 7).
- Frankfort, H., Jacobsen, T. & Preusser, C.
1932 *Tell Asmar and Khafaje, the First Season's Work in Eshnunna 1930/31* (S.A.O.C. 16).
- King, Leonard W.
1915 *A History of Babylon from the Foundation of the Monarchy to the Persian Conquest*, London.
- Koldewey, Robert
1911 *Die Tempel von Babylon und Borsippa* (W.V.D.O.G. 15), Leipzig.
- 1914 *The Excavations at Babylon* (A.S.Johns 訳), London.
- Langdon, Stephan
1906 *Lectures on Babylonia and Palestine*, Paris.
- Layard, Austen Henry
1849 *Nineveh and its Remains*, London.
- 1853 *Discoveries in the Ruins of Nineveh and Babylon*, London.
- Müller, Valentin
1940 *Types of Mesopotamian Houses*, *J.A.O.S.* 60, pp.151-80.
- Rawlinson, George
1871 *Five Great Monarchies of the Ancient Eastern World; or the History, Geography, and Antiquities of Chaldaea, Assyria, Babylon, Media, and Persia* (2nd ed.), London.
- Rich, Claudius James
1839 *Narrative of a Journey to the Site of Babylon*, London.
- Schoff, Wilfred H.
1914 *Parthian Stations by Isidore of Charax, an Account of the Overland Trade Route between the Levant and India in the First Century B.C.*, Chicago.
- Speiser, E.A.
1935 *Excavations at Tepe Gawra*, vol. I, New York.
- Trimingham, J. Spencer
1979 *Christianity among the Arabs in Pre-Islamic Times*, London/Beirut.
- Woolley, C.L.
1928 *The Sumerians*, Oxford.